

世記46章1～7節

さて、見えない神様を、見ているかのごとくしつかりと見つめながら、その神様に従った人がいました。彼はいつも神様を、その御旨を第1にしていました。まさにその人こそヤコブでした。今朝は見えない神様を、はっきり見せてくれたヤコブについて学びます。

神は、夜の幻の中でイスラエルに「ヤコブよ、ヤコブよ」と語りかけられた。彼は答えた。「はい、ここにおります。」すると神は仰せられた。「わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下ることを恐れるな。わたしはそこで、あなたを大いなる国民とする。このわたしが、あなたとともにエジプトに下り、また、このわたしが必ずあなたを再び連れ上る。そして、ヨセフが、その手であなたの目を閉じてくれるだろう。」 創世記46：2～4節

さて、「死んでしまったとばかり思い込んでいた、愛する子ヨセフが生きていた。」そんな素晴らしいニュースを知らされた父ヤコブでしたが、なかなか信ずることができませんでした。ところが、ヨセフが父ヤコブのために送ってくれたその車を見て（45：27、読む）確信することができました。

へ ———

早速、ヤコブとその家族はエジプトに向かうことになりました。ヤコブの心はもうエジプトに行っています。では、その心のごとく彼はそのままエジプトに行ってしまったのでしょうか？

そうではありませんでした。彼はベエル・シェバに来た時に、そこで神様にいけにえを献げ、礼拝をしました。それは、このエジプト行きが本当に神様から出ていることか、どうかを確認するためでした。しっかりとみことばを、神の導きをいただきなかったのです。

私たちは日常生活の中で「当然」と思っていることでも、そのことが本当に主の御旨かどうか、神から出ていることか、再度祈ってみる必要があるのではないのでしょうか？

———— 礼拝をしたヤコブ

ブ ———

さて、私はこの所から、神によって選ばれている神の器としてのヤコブの姿を見ることができました。私たちも同じようにすべきですね。ヤコブのように、どこに行く時でも、何かを決断しなければならぬ時でも、しっかりと祈って導きをいただくべきなのです。決して早まって踏み出してしまわないようにしたいものです。

それにしても今回、ヨセフに招かれて急に決まったエジプト行きでしたが、今、ヤコブの心のどこかに平安がなかったのかも知れません。

その理由（わけ）ですが、昔ヤコブの父イサクがその時代、同じように飢饉にあった時の出来事です。父イサクは自分たちが生きていくために「エジプトに下ろう。」と考えました。そんな時に、神がイサクに現れて語ったことは「エジプトへは下って

はならない。わたしがあなたに告げる地に住みなさい・・・」(26:2節)でした。

実は、聖書の中で、エジプトという国は肉的な国とされていて、このエジプトに下ることは、神への反逆であるともされていました。ですから、ヤコブは迷ったのです。「私はエジプトに行ってもよいのだろうか？」と。

私たちは誤解のないようにしなければなりません。エジプトに下るということ自体が悪いものではありません。神が「エジプトに行ってはならない」と言われた時に、エジプトに下ることが、悪いことなのです。

———— 恐れるな

ところが、今回ヤコブに語られた神からのことは、それとは反対に「エジプトに下ることを恐れるな。」でした。そして、更に「このわたしが、あなたとともにエジプトに下り・・・」とまで語られています。このお言葉をいただいて、勇気百倍ヤコブは、エジプトに向かって出発することになります。

———— 3つの動機

さて、今回も含めて、ヤコブの家族は、3回もエジプトに下ることになります。その時、その時にいろいろの動機がありました。

- ・第1は、食料を得るためでした。
 - ・第2は、愛するわが子ヨセフに会うためでした。
- そして
- ・第3は、神の御旨を確信して、でした。

それにしても、同じエジプト行きですが、その動

機は様々です。今回の場合も最初ヤコブは愛するヨセフに会うために、エジプトに向かおうとしたのです。しかし、神に祈り、みことばを、いただいた後には、神様の保証と祝福を受けてエジプトに向かおうとしています。この第2と第3の違いは非常に大きいと言わなければなりません。同じことをしているようですが、それは天と地ほどの違いがあります。

——— 一味違う人生を

私たちの日常生活の中でも、同じことをしていても、神様からの評価が全く異なる場合があります。ある時は、①肉的な動機から、またある時は、②人間的な喜びを求める動機から、そして更にある時は③神に従うという、ただそれだけ・・・。

例えば、「礼拝に行く」理由を考えてみましょう。

- ① 今まで、毎週行っているから。行くのは当たり前。
- ② 礼拝で奉仕をしなければならないので。それが第一。
- ③ 神様を礼拝するため。それが当然。

私たちはこの中のどこに属するのでしょうか？

それにしても同じ様に行動している時でも、神の前に一味ちがう、神様に喜ばれ受け入れられる人生を送りたいものです。

ここでもう一度、私たちの生き方を再点検してみましょう。

それにしてもヤコブは今、自分の人生のハンドル

を神様にしっかりと握っていただいたのです。決して自分でハンドルを動かそうとしませんでした。そんなヤコブに神様はいつも共におられました。

最後に 5～7 節、26～30 節をお読みしましょう。

さて、私たちの人生を考えてみましょう。

ある人が、田舎の道を散歩していた時に、石切り場があつて大勢の人々が炎天下、忙しそうに働いていました。たまたま働いている人が近くにいたので、彼はその中の何人かの労働者に話しかけました。「大変ですね。何をなさっているのですか？」

——— していることを知りたい

いかい ———

・最初の男は腹立たしそうに言いました。「お前さんは見えないのかね、わしは石を切っているんだ。」

・2 番目の男は、顔も上げずに答えました。「わしはこれで週に百ポンド稼いでいるのさ。」

・3 番目の人にも同じ質問をしました。すると、立ち上がって言いました。「私のしていることを知りたいのかい。私は大聖堂を立てているんだよ。」

——— 大聖堂を立てているんだ

だ ———

① 最初の男は、つるはしだけにしか目に入りませんでした。食うために働いていたのです。

② 二番目の男は、お金以外に興味がありませんでした。金曜日の給料袋以外何も見えませんでした。お金のために働いていたのです。

③ 三番目の男は、今の自分に与えられている仕事の未来を見つめていました。たとえ石切り場だけでその生涯を終えてしまったとしても、彼はその人生

に誇りを持っていました。大聖堂を完成させるというその一部を確実に、自分は担っているんだということを知っていたからです。彼はそれがどんなに小さいように見える働きであっても、神様に喜ばれる生き方をしていたのです。

聖書のことば。「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現わすためにしなさい。」